テル・ゼロール出土の土器陰刻文

後 藤 光 一 郎

序

1. 土器片の性格
2. 層位学的検討
3. Palaeography の検討
4. 層位と palaeography
5. 文の検討
6. 結 論

序

テル・ゼロールにおける1964年の第1次発掘のさい、北のテルのTトレンチの区画16で7月23日に採集された土器片（容器番号 136）を洗滌中、そのなかから土器陰刻文が一つ発見された。¹⁾ その土器片は皿形あるいは鉢形土器の輪底の一部を含むもので、その輪底の内側に沿って一行の陰刻文がきざみつけられていた。文字は古代北西セム語の文字できわめて明瞭にのこっており、b/r(/d)‘・l’smkと読みとれた。

1. 土器片の性格

陰刻文のある土器片（TZ 136/1、写真版）の大きさは8.7×6.7cmで凸字形に似た不規則な形をしており、その凸字の下半分の長方形の部分にそれを横切るように輪底の $\frac{1}{4}$ が残っている。輪底はその彎曲率から直径が約10cm だったのがわかる。土器表面は赤褐色ないし淡褐色、焼成は比較的低温、ロクロをつかって内外両面に burnish が密にほどこされている。輪底につづく部分は緩傾斜の平坦面しかのこっていないので、こ

の土器が皿形だったのか鉢形だったのか不明であるが、サマリア・オストラカの例からすると両方ありうる²⁾

皿形土器であれば、浅いパラボラ形をなす厚手の土器で、周縁部は多少薄くなるがまだ厚みを残し角ばった周縁で終る形のものであろう。たとえばTZ I, Pl. VII 5 (TZ304/1, 第VII層b), 赤色スリップとロクロによる burnish がほどこされており、焼成は比較的低温による。これはSS III, Fig. 4, 18(前880～40年), p.110と比較されるが、後者はさらにHESのオストラコンNo.56と類似した周縁部をもち burnish をほどこされている。また Hazor II, Pl. LV, 32 (第VIII層, 前9世紀)³⁾と比較されるが、これも同様な周辺部をもち表面処理をほどこされているサマリア土器である。TZ304/1はそのほかメギッド、テル・ベイト・ミルシム等の出土例と比較された。結局この形の土器の年代は前9～7世紀、とくに前9～8世紀と推定される。その他 TZ 552/2 (第VII層c), 729/1 (第VII層c)からも同様の結果をえた。

鉢形土器であれば、輪底よりそとへひろがる平坦な底部が比較的低い垂直に近い周縁部に移行し、周縁部の高さが比較的低く、その厚さより幅が多少広く両側にそれだけ張り出した平らな口縁部に終る形の鉢形土器であろう⁴⁾。たとえば TZ 292/1(第IX層), (520/1, 地表面で採集, 推定層位は第VIIIまたはVII層), 740/1(第VII層b-c)。これらからも皿形土器のばあいと同様な推定年代をうる。

いずれにしろ陰刻文のある土器片は後期鉄器時代の典型的な土器の一部で、これはサマリア土器の影響を示す前9～8世紀の土器である。

また陰刻文の文字が輪底内側に沿って丁寧に配置されていることは、この土器片が破損ないし破壊した破片に文字を記したいいわゆるオストラコンではなく、土器が完全な状態にあったときに記された土器陰刻文であったことを意味するものと思う。

2. 層位学的検討

この土器片をめぐる問題の一つは層位に関することである。7月23日の Graphic Basketlist によると問題の土器片は T16 を西北西から東南東へ横ぎる第Ⅶ層の赤色日乾レンガ壁の南側を清掃中レベル 30.9—8 m から出土したになっている。この地点が地表面に近かったことと、層位学的解釈が困難であったことが問題を複雑にしている。

T16 は北のテルの南斜面にあり T トレンチのなかでもっとも傾斜した場所にあるため当初北半分からまず掘りはじめた。やがて区画の中央部に現われた赤色レンガ土塊から建造物の所在が推定されたので、南半分を二段にわけ合計三段の階段状を呈しながら慎重に清掃をくりかえし掘り上げていった。22 日北西部においてレベル 32 m に日乾レンガ壁の北縁を確認し、中央部でそれより約 20 cm 高いレベルに扶壁とそれにつづく部分をとらえた。また南縁をもとめて南西部（Locus 8 の主要部分）をレベル 30.8 m まで掘り上げた。翌 23 日はそのあと南西部の発掘壁面をけずり清掃したのである。赤色日乾レンガ壁本体の南縁が確認できたのは 8 月 3 日である。またフィールド・ノートと現場写真によると T16 で南半分を掘りはじめた日すでに東断面上に区画の南境界標の 1.95 m 北、レベル 31.7 m からほぼ傾斜と平行して南へ下降するレンガ土と表土の境界を認めた。このレンガ土の北端の位置は丁度レンガ壁のそれと一致する。このことと 22 日のレンガ壁北縁確認のさいの事情を考え合わせると T16 のとくに東側では表土が比較的浅かったといえる。T16 西断面⁴⁾から判断して 23 日南西部（Locus 8）における作業は総じて赤色日乾レンガ壁本体（第Ⅶ層 d）を補強した擁壁⁵⁾（第Ⅶ層 c）もしくはレンガ壁から崩壊したレンガ土を含む表土と関わりをもっていたはずである。それらの露出面積から考えると陰刻文土片器は前者に由来する確率の方が高い。すなわち第Ⅶ層の赤色日乾レンガ壁が存続した年代、前 9 世紀後半～8 世紀前半、とくに前 9 世紀末期～8 世紀初頭に属する公算が強いといえる。

3. Palaeography の検討

テル・ゼロール土器陰刻文の文字は8文字のこっているが、そのうち l が重複しているのでアルファベット文字としては b/r (/d), ' , l , ' , s , k , m の7文字である。これらは 'cursive'⁶⁾の要表が加った 'formal'⁶⁾文字で、先端の尖ったものでたんねんに彫りこまれている。テル・ゼロールの南約40kmにある同じ海岸平野の遺跡テル・カシールで発見された大体同じ時代(第Ⅶ層、前800～732年)の二つのオストラカ⁷⁾の文字とも異なり、恐らくテル・ゼロールと政治、経済、文化の面で関係が深かったその南東約30kmにあるサマリアのオストラカ(前8世紀中期)の文字とも異なる。とくに m, k がそうである。テル・ゼロールの土器陰刻文の文字はアラム文字だという意見がたまたま当時イスラエルに滞在していたクロス教授⁸⁾やイスラエル考古局の速報⁹⁾によって出された。筆者の見解を先取りするなら、たしかにアラム文字との共通性をもっとも著しいがヘブライ文字、フェニキア文字と共通する面もみのがせない、ということになる。

(1) b/r (/d)。最初の文字は上部が土器片の破損部分にかかっているため正確な形を知ることができないが b または r (または d) である。右の縦の画が下方先端で左下方に屈折しているが、現物でその屈折した部分を調べると、断面が表面から 45° あまりの角度で斜めに狭く深くくいこんだ土器焼成時のきずで、文字の他の部分をくらべるなら書記がこの刻文に使用した道具でこのような溝をほりこむのはまず不可能なことがわかる。このきずの右端は縦の画との接点より右へ出ている。書記はこれを字の一部として意識的に利用したか、たまたまきずにぶつかったものでそこで止めたかである。前の場合の方がこの字の実状に合致するように思う。左の垂直の画が右の縦の画により深くくいこんでいるのが示しているように書記は頭部の左側を先に書く普通の筆はこびとちがって縦の画を先に彫りつけ、きずに達する少し手前で道具を右に傾けて陰刻

ヘブライ文字	資料・年代	
	テル・ゼロール (前八世紀前半) ゲゼル・カレンダー (前十世紀後半) ハッオールⅧ (前九世紀) ハッオールⅦ (前八〇〇―七六〇年) ハッオールⅦ ^a (前七四〇―七三二年) テル・カシール (前八〇―七三三年) サマリア・オストラカ (前八世紀中期) サマリア土器陰刻文 (前八世紀中期) サマリア・オストラコン C121 (前七五五年頃) サマリア・オストラコン C122 (前七四五年頃) サマリア・オストラカ C123・C124・C125・C126 (前七三五年―七二五年頃) ムラバット・パピルス (前八世紀) シロアム碑文 (前七〇〇年頃) シロアム墓誌文 (前七〇〇年頃) テル・エル・ヘシ (前八世紀?) メギッド (前六五〇年)
アンモン文字	アシモ・碑文 (前八―七世紀)

フェニキア文字

資料・年代	資料・年代
エル・ハドル (前十二世紀)	、
アヒーラム碑文 (前二〇〇〇年頃)	k
シヒトパール碑文 (前十世紀末)	l
ヒエロス銅へら 陸刻文 (前十世紀)	m
キプロス碑文 (前九世紀)	s
キラムワ碑文 (前八二五頃)	c
ベアル・レバノン碑文 (前七三二—七二八頃)	
カラテベ碑文 (前七二〇年)	
カラマシメント陸刻文 (前七〇〇年)	
アルタ島碑文 (前七世紀前半)	

アラム文字

タルカト碑文 (八五〇年頃)	、
アル・シニシ 陸刻文 (前九世紀後半)	k
サイル碑文 (前八〇〇年頃)	l
ベダド碑文 (前八世紀中頃)	m
ベ・ナムワ二世碑文 (前八世紀中頃)	s
ベ・ラキア碑文 (前八世紀後半)	c
ス・ワイール碑文 (前八世紀後半)	
ネーラア碑文 (前七世紀)	
ルリタマシ銅水差陸刻文 (前八一七世紀)	
ルリスタシ銅水差陸刻文 (前七〇〇年頃)	

線の幅をひろげ、きずの右端に少しでも合致するように工夫したらしいこと、縦の画が異状に長くなったためそれと釣合うよう左向頭部の下の画（ここでは左の垂直の画）をも異常に長く下方にのばしたと考えられること、**r**（と**d**）は普通左の縦の画が水平ないし左傾斜（時計の針と反対方向）であることによる。その結果下向きの鋭い鋭角をもった縦に長い三角形をした頭部が生じたと考えられる。

もし**r**（または**d**）とすると右の縦の画の右傾斜が古い特長を示していることになる。¹⁰⁾ヘブライ文字、モアブ文字、フェニキア文字、アラム文字等についてしらべると、総じて**r**と**d**の縦の画の右傾斜は前10～9世紀、とくに9世紀に左傾斜と混在しこの時期をすぎると左傾斜になる。さらにテル・ゼロール土器陰刻文のように左の縦の画（元来左向頭部の下の画）が垂直になっている例はまずないといってよい。

縦の画を右に傾斜させればあい、頭部が鋭角を下に向けた縦に長い三角形をなす**b**の例はないわけではない。¹¹⁾しかしこれは殆んどのばあい左傾斜した縦の画上部に先端が左方につき出した頭部が付けられているからで、もしこれをテル・ゼロール土器陰刻文のばあいのように頭部の下の画が垂直になるまで右傾斜の位置に回転させると、下方を向くことになる鋭角がテル・ゼロールのばあいより大きいため縦の画の右傾斜がよりきつくなり、左下方に屈折した縦の画の下部は水平あるいは左上方にはねあがることになる。

また**b**のばあいフェニキア文字、アラム文字は前9世紀に直立ないし左傾斜に変わるが、ヘブライ文字は右傾斜を持続しこれがその特長となる。モアブ文字では両者が混在している。

(2) ‘。亀甲紋のように6本の直線を組みあわせた形をしている。しかし書記の‘ayinのideaが円であったことはそれらの配置から容易に推察される。しかもその円の大きさが他の字に対して比較的大きいのが特色である。次の字**l**と比較したばあい、ヘブライ文字では‘の径ない

し長径と 1 の縦の画の長さの比は $\frac{1}{2}$ 以下である。

ヘブライ文字：もっとも古い資料、前10世紀後半のゲゼル・カレンダーで $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ 、左右二画の弧線を合わせる筆はこびで、長径が左傾斜の円に近い楕円形を描いている。

前 8 世紀中期のサマリア・オストラカでは $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{8}$ 、まれに $\frac{1}{4}$ 。¹²⁾ 同様な ‘ が前 735 年頃のサマリア・オストラコン C1101 にみられる。¹³⁾ これらサマリア・オストラカの ‘ はゲゼル・カレンダーのそれと同様二画であるが、HES のオストラカのは長径が右傾斜の楕円形を示し、これが以後ヘブライ文字における ‘ の特長となる。

前 8 世紀に属するムラバアトのパピルスも長径がほとんど水平に近い右傾斜の ‘ を示すが、その長径と 1 の縦の画の長さの比率は $\frac{1}{2}$ 前後である。¹⁴⁾

これにたいして例の比率が $\frac{1}{2}$ あるいは少なくとも $\frac{1}{3}$ 以上で円形の、はモアブ文字、フェニキア文字、アラム文字の特長といえる。

モアブ文字：前 9 世紀中頃のメシャ碑文が $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ である。¹⁵⁾

フェニキア文字：パレスチナのベツレヘムの西 5 km のエル・ハドルで発見された前12～11世紀の投槍穂先陰刻文では比率 $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ 。

ビュブロス出土の前1000年頃のアヒーラム碑文では $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ 。

ビュブロスで発見された前10世紀の青銅製筥陰刻文では $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 。¹⁶⁾

ビュブロス出土の前10世紀末のシピトバアル碑文も同様。

キブロスで発見された前 9 世紀の碑文では $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ 。

ゼンジルリ出土の前 825 年頃のキラムワ碑文では $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{3}{4}$ 。¹⁷⁾

前 720 年頃のカラテベ碑文では $\frac{2}{3}$ 。

マルタ島で発見された前 7 世紀後半の碑文では $\frac{1}{2}$ である。¹⁸⁾

アラム文字：前 850 年頃のベン・ハダド I 世のメルカルト碑文では $\frac{1}{2}$ 。

アレppoの南西約45 km のアーフィスで発見された前 800 年頃のザキル碑文では $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ 。¹⁹⁾

前8世紀中頃のパナムワ I 世のハダド碑文では $\frac{1}{2}$ ²⁰⁾。

同じくパナムワ II 世の碑文では $\frac{1}{2} \sim \frac{3}{4}$ ²¹⁾

同じくアレppoの南東約25 km のスフィーレーの住民が発見した碑文では $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{8}$ ²²⁾

ゼンジリリで発見された前8世紀後半、733/2 ~ 27年のバラーキブ碑文では $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{4}$ ²³⁾

同じくゼンジリリ出土のもう一つのバラーキブ碑文では $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{3}$ ²⁴⁾

アレppoの南東約7 km のネーラブで発見された前7世紀の碑文では $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{8}$ である²⁵⁾

以上のことからテル・ゼロール土器陰刻文の‘は’はフェニキアないしアラム文字の特色を示しているといえる。

(3) 1. すでに‘との関係でわかったことが1についてもいえるが、さらに1だけ切りはなして考察してみる。テル・ゼロール土器陰刻文の1の縦の画は右傾斜であるが、ゆるやかに彎曲し下部で垂直になり、右上方への画につながる。二つのうち最初の1では右上方への画も彎曲して右下方にわずかに張り出している。二番目の1ではこれは直線であるが、縦の画との接点よりやや左下方からはじまっている。

ヘブライ文字：総じて縦の画の長さにたいして右上方への画のそれが短い。

ゲゼル・カレンダー（前10世紀後半）には1が2例あるが、一つは両画が鋭角で接するのではなく、アラビア数字の6の字のように、縦の画は右傾斜にはじまり途中で屈折して左傾斜になり、その下端は円を描いて右から上方へ向い、つぎに縦の画の屈折点から右へ水平画をひき、さきほどの上方へ向う線の末端に達しさらに右へつき出しているように見える。この最後の水平画は1本来のものではないかもしれない²⁶⁾ いずれにしろ1の下端が円ないし半円形になるのは前14~13世紀ごろの初期北西セム文字にさかのぼる特長である²⁷⁾。そこで1のばあい下端が角をな

すほうがむしろ ‘rapidary’, ‘cursive’ であって、ゲゼル・カレンダーの二番目の l はその特長を示している。これはヘブライ文字資料のなかでテル・ゼロール土器陰刻文の l にもっとも近似した例の一つであるが、縦の画には殆んど彎曲がなく、²⁸⁾ 両画の長さの比率は $\frac{3}{2}$ で、テル・ゼロールのばあいの $\frac{9}{13}$ 、 $\frac{7}{12}$ にくらべて低い。

この比率と画の彎曲の点で一層近似している例はハツォール第Ⅷ層（前 9 世紀）から出土した土器陰刻文の l である。²⁹⁾

ハツォール第Ⅵ層（前 8 世紀前半）の 2 例の土器陰刻文に l がそれぞれ一つずつある。³⁰⁾ そのうち 1 例は比率 $\frac{1}{2}$ 。両角の彎曲、角度いずれもテル・ゼロールのばあいにきわめて似ている。もう 1 例は縦の画の上端が欠けているが、同じ土器片に記された m, k の縦の画がそれほど長くないことから l のそれも欠損部分はわずかと考えられる。比率は $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ とみられる。

同じく第Ⅴ層 a（前 740 ～ 732 年）の土器陰刻文の一つの l の一つも、³¹⁾ 縦の画が直線であるが右上方への画は彎曲しており、比率 $\frac{1}{2}$ でテル・ゼロール土器陰刻文のはじめの l に似ている。もう一つの l は下端が丸味をおびているが、比率はおおよそ $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ である。

同じ層に属する別の土器陰刻文も比率 $\frac{1}{2}$ である。³²⁾

テル・カシールで発見された前 800 ～ 735 年のオストラコン No. 1 の最初の l も比率 $\frac{1}{2}$ 、両画の彎曲、角度の点でテル・ゼロールのばあいにきわめて近い。他の二つの l は ‘formal’ であるが、縦の画は長くない。³³⁾

サマリア土器陰刻文 HES, Pl. 55a（前 8 世紀中期）の l は ‘formal’ であるが、縦の画はそれほど長くない。

サマリア・オストラコン C 1101（前 735 年頃）では縦の画は右下方への画に比べて非常に長く比率は $\frac{1}{3}$ に達する。縦の画の彎曲はテル・ゼロールのばあいと逆に右側にやや張り出している。³⁴⁾

メギット出土の前 650 年頃の土器陰刻文の l は縦の画の彎曲、両画の

なす角度の点で類似しているが、両画の長さの比率は $\frac{1}{3}$ と小さい³⁵⁾

モアブ文字：メシャ碑文の l は徹底して‘formal’なので比較が困難であるが、縦の画にたいし下部の釣針形彎曲は比較的小さい。

フェニキア文字：エル・ハドル投槍穂先陰刻文では‘formal’で一部が開いた不完全な円形をなす。

アヒーラーム碑文（前1000年頃）には‘formal’と‘cursive’が混在しており、後者は両画とも彎曲しているかいずれか一方が彎曲しているかで、鋭角をなし、比率は $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ 。

ビュプロス青銅製篋陰刻文（前10世紀）では‘formal’が一つあるがあとは‘cursive’である。両画は直線で、鋭角をなし、比率は $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 。

シピトバアル碑文（前10世紀末）にも‘formal’と‘cursive’が混在し、後者はアヒーラーム碑文のばあいと同様である。

キプロスの碑文（前9世紀）では‘formal’であるが、なかに‘cursive’の影響を多少うけたものが二三ある。それらはいずれも両画が彎曲しており、角の先端は明確ではないが鋭角で、比率は $\frac{1}{2}$ 。そのうちの一つは縦の画が下から $\frac{1}{3}$ あたりで屈折しており、ゲゼル・カレンダーの最初の l に類似した形を示している。

キラムワ碑文（前825年頃）の l は‘cursive’で両画は彎曲し、テル・ゼロールのばあいより鋭い鋭角をなし、比率は $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 。

前773～38年頃のバアル・レパノン青銅製鉢陰刻文では両画とも直線ないし彎曲線で、鋭角をなし、比率は $\frac{1}{2}$ ³⁶⁾

カラテベ碑文（前8世紀後半）では‘formal’であるが、比率は約 $\frac{1}{2}$ 。

キプロスのキュトロイから出土した前7世紀前半の碑文では‘cursive’で、両画彎曲、テル・ゼロールのばあいより鋭い鋭角をなし、比率 $\frac{2}{3}$ であるが、縦の画が下端で屈折している³⁷⁾

マルタ島碑文（前7世紀後半）では縦の画が彎曲し、両画は鋭角をなし、比率は $\frac{2}{3}$ であるが、右上方への画は直線ないし逆に上方にやや彎曲する。

このようにフェニキア文字では‘cursive’の l が前7世紀にさらに発達をみせはじめるが、他方ではテル・ゼロールにおける l に極めて類似した l が前6世紀までつづく³⁸⁾しかし総じて右上方への画は短くなる。

アラム文字：前9世紀後半のアルスラン・タシュの象牙陰刻文では縦の画が直線なのと彎曲した例があり、いずれも両画のなす角度は鋭角、長さの比率は $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ ³⁹⁾

メルカルト碑文（前850年頃）の l は縦の画がほぼ直立した‘cursive’であるが、両画が直線なのとわずかに彎曲したのが混在する。それらの角度は鋭角、比率は $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{3}$ 。

ザキル碑文（前800年頃）は徹底して‘formal’であるが、若干‘cursive’の影響をうけている（たとえばB2, 8）例を手がかりにすれば両画の比率は $\frac{1}{2}$ である。

ハダド碑文（前8世紀中頃）では‘cursive’で、両画が彎曲、鋭角をなし、比率は $\frac{1}{2} \sim \frac{2}{3}$ 。

同じくパナムムワII世碑文においても同様の結果をうる。

同じくスフィーレ碑文は‘cursive’の影響をうけた‘formal’で、この両極の中間のあらゆる形が現われ、両画のなす角度も多様であり、比率も $\frac{2}{3} \sim \frac{3}{4}$ と幅がひろい⁴⁰⁾

バラーキブ碑文（前8世紀後半）の l も前者と同様多様性にとみ、「屈折型」が比較的目につく。

ネーラブ碑文（前7世紀）では‘formal’にたいする‘cursive’の影響がさらに強まり、縦の画が長くなり、下端を右下方へ書き流したり、筆の返りが上方にはねあがったり、縦の画が左傾斜の例まである。両画が直角に近い鋭角をなす例が若干ある。両画の比率は $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{2}$ である。

以上、ヘブライ文字、とくにハツォール土器陰刻文との比較、両画の長さの緩慢な変化、また縦の画の屈折を‘formal’にたいする‘cursive’の影響とみたばあいの混在の状況、これらのことからテル・ゼロール土

器陰刻文の l は少なくとも前 7 世紀以前，すなわち前 9 世紀後期から 8 世紀前半と考えられ，アラム文字の影響を比較的強くうけていると推定される。

(4) '。縦の画は比較的長く，下端が右下方へ 3 mm ほど「はね」ている。これは b のばあいと異なり，元来書記が付加したもので土器表面のきずではない。一方縦の画下部の左右に一つずつ「はね」と同方向にある線様のものはきずである。「はね」があるのは珍しい例といえる。頭部の水平方向の上下二画は左端で互いに接して V 字形をなし，尖った先端は縦の画の左につき出し，V 字の中線は縦の画の上から $\frac{1}{2}$ あたりでこれとほぼ直交する。前 9 世紀から 8 世紀にかけて V 字形頭部が縦の画の上方に寄っている例はメシャ碑文，ハツォール第 VI 層土器陰刻文（前 800～760 年），⁴¹⁾ テル・カシール・オストラカ（前 800～735 年），ムラバアト・パピルス（前 8 世紀），⁴²⁾ サマリア・オストラコン C1102（前 745 年頃），⁴³⁾ サマリア・オストラカ（前 8 世紀中期），サマリア・オストラカ C1220，C1307，C1266（いずれも前 735 年頃），⁴³⁾ C689（前 725 年頃），⁴³⁾ シロアム碑文（前 700 年頃）にみられる。⁴⁴⁾ ' の頭部が上方に寄っているのはこの時期のヘブライ，モアブ文字の全般的特色といえよう。

フェニキア文字ではゼンジリ出土のキラムワ碑文にみられる程度で，この特色は総じて前 6～5 世紀，とくに 5 世紀以後になって現われる。

アラム文字ではメルカルト碑文の ' のうち 2 例の頭部が上方に寄っており，しかも縦の画の下部が右へ彎曲している。ザキル碑文でも頭部の V 字が縦の画の中央と上方寄りにある例が混在している。ハダド碑文，パナムワ II 世碑文も同様である。スフィーレ碑文では頭部が上方に寄っている例はごくわずかである。

以上のように，' の V 字形頭部が上方に寄るのは主としてヘブライ文字の性格である。上方寄りの位置，V 字の角度，縦の画と水平方向の画

の長さの点でこれらのなかでもテル・ゼロール土器陰刻文の'により類似した例をあげると、メシャ碑文、ハツォール第Ⅵ層土器陰刻文、サマリア・オストラコンC1220、サマリア・オストラカで、とくにメシャ碑文、サマリア・オストラコンc1220がもっとも近い。

さらにアラム文字のメルカルト碑文の'を考えあわせると、テル・ゼロール土器陰刻文の'の年代は前9世紀後期から8世紀前半と推定され、さきのlと同じ結論となる。

(5) s。頭部は3本の水平方向の平行な画からなり、下ほど長さが短くなる。3本目の画の左端には左上方から尖筆をおろしたため、その方向を向いた3mmほどの短い画が付加されている。縦の画は頭部の一番上の画の右よりから下の2画と交差して下方へさらに長くのびる。全体が右に傾斜している。このような条件に大体合致するsの例は、ゲゼル・カレンダー、メシャ碑文、サマリア象牙製品陰刻文、前700年頃のシロアム墓誌文、⁴⁵⁾アヒーラーム碑文、ビュブロス青銅製鉢陰刻文、キラムワ碑文、バアル・レバノン青銅製鉢陰刻文B、ザキル碑文、前8世紀前半のルリスタン青銅製水差陰刻文、⁴⁶⁾パナナムワI世のハグド碑文、⁴⁷⁾前700年頃のルリスタン青銅製鉢陰刻文、⁴⁸⁾スフィーレ碑文⁴⁹⁾である。

サマリア・オストラカ、カラテペ碑文のsは'cursive'の特長を示し頭部の水平方向の3画にはいずれも右端から次の画へうつる筆のはこびを示す下方を向いた短い「はね」がついている。

これらのなかでテル・ゼロール土器陰刻文のsにもっとも類似しているのはゲゼル・カレンダー、メシャ碑文、シロアム墓誌文、バアル・レバノン青銅製鉢陰刻文B、ザキル碑文、ルリスタン青銅製鉢陰刻文である。サマリア・オストラカとカラテペ碑文がこのばあい下限を示すとする、テル・ゼロール土器陰刻文の年代は前9世紀後期～8世紀前半と推定され、lと'のそれと一致する。

(6) m。これは'cursive'で、まず左上方から右下方に向い上に開いた

頭部の半円形を描き、尖筆を返して縦の画を長く下方へひき、下部は左へ彎曲させる。最後に縦の画と平行に頭部の中央の画をそえる。後者は半円の線より下へ出ない。全体がやや右に傾斜している。

これはフェニキア、プニク文字に特長的な形であるが、目下予測されている時代のパレスチナではあまり例のない形である。これに近い形の例を求めると、前 8 世紀のテル・エル・ヘシ出土の土器陰刻文、⁵⁰⁾ サマリア・オストラコン C1011、⁵¹⁾ 前 735 年頃の C1307、⁵²⁾ シロアム碑文、カラテペ碑文⁵³⁾ がある。

以上のようにこの形の **m** はこの時期のアラム文字の特色ではない。わずかに前 700 年頃のルリスタン青銅製鉢陰刻文に 1 例がみられる。これは ‘square’ 型で、頭部の水平方向の画がそのまま縦の画の頂に達する形のものかもしれないが、あるいは Dupont-Sommel のコピーの **m** から推定されるように「ダブル L」型かもしれない。⁵⁴⁾

テル・ゼロール土器陰刻文の **m** はフェニキア文字と共通の特色をもっているといえよう。頭部中央の画は水平方向の画の下へのび、次第に下へつき出た部分の方が長くなる発展過程をたどるので、カラテペ碑文の **m** が下限である。

ところで縦の画を長く下方へ彎曲させてのばすのはヘブライ文字の特色である。メシャ碑文、ハツォール第 VI 層土器陰刻文、サマリア・オストラカですでに極度に発達している。それにテル・ゼロール土器陰刻文の **m** にもっとも近い例はテル・エル・ヘシ土器陰刻文、サマリア・オストラコン C1011 である。そこで前者の年代は前 8 世紀前～中期で、前 9 世紀にさかのぼれるかどうかは、はなはだ疑問である。

(7) **k**。左下部が土器の破損部分にかかっているので頭部の大部分しか残っていない。しかしこの字も特長のある形をしている。**kaph** は元来「てのひら」であるが、この時代までに指は 3 本に簡略化された。テル・ゼロール土器陰刻文の **k** は、まず左上方から右下方へ中の指を彫り、そ

の下端と出会うように縦の画を右上方から左下方へおろし、左へ彎曲させながら中の指よりさらに下までのばす。最後に **m** のばあいと同様に元来左の指だった画を中の指の画の中程少し上方から後者を横切って左下方へさげる。前13世紀から11世紀にかけて、一部ではさらにのちまで、**k** は鳥の蹠のように一点から3本の画が扇状にひろがる形だった。その右の画が左下方へのびて縦の画となった。残った中と左の画のいずれかがもう一方の画の先端の方へ移動することにより、一つはラキシシュ・オストラカのように残った左の画の先端から上方へのびる画をつけた形となり、他はテル・ゼロール土器陰刻文のばあいのように中の画から下方へくだる画をつけた形となり、左の画が中の画の右上先端から左下方へたれさがる形にいたる⁵⁵⁾

このような条件で類例を求めると、サマリアで発見された前738/7年頃の土器陰刻文、⁵⁶⁾ カルタゴで出土した前700年頃のもの金製ペンダント陰刻文、⁵⁷⁾ ザキル碑文、スフィーレ碑文、バラーク碑文、ルリスタン青銅製鉢陰刻文がある。

これらの類似はテル・ゼロール土器陰刻文の **k** のアラム文字との強い結びつきを示す。年代は前8世紀と推定される。

文字	推 定 年 代	文 字 の 性 格
(b)		(ヘブライ文字)
‘		フェニキア, アラム文字
l	前9世紀後期～8世紀前半	アラム文字
,	” ”	ヘブライ文字
	” ”	(「はね」: アラム文字)
s	” ”	ヘブライ, フェニキア, アラム文字
m	前8世紀前～中期	ヘブライ文字
k	前8世紀	アラム文字

以上 palaeographical な検討の結果をまとめると、テル・ゼロール土器陰刻文は総じてアラム文字といえる。しかし同時にヘブライ文字の典型的特長をも併わせもっており、果してアラム人書記あるいはアラム文字筆記法の正統なトレーニングを受けた書記が書いたかどうか疑わしめるに充分である。また palaeographical な推定年代は前 8 世紀前半とするのが妥当と考える。

4. 層位と palaeography

2 節で検討したとおり、この土器陰刻文の層位は第Ⅶ層 c（前 9 世紀第 4 四半世紀～8 世紀初）である可能性が高い。それにたいして palaeography の検討の結果は前節のとおり前 8 世紀前半と出た。両方の結果の間に最大限数十年のずれがある。両方が一致するのは前 8 世紀初期だけである。しかし第Ⅶ層 c の擁壁建設時にこの陰刻文土器片がその中に混入したのであれば、それは前 825 年頃で palaeography の検討結果からずれることになる。そこで後者に重きをおくなら土器片は擁壁の修復あるいは補強のさい⁵⁸⁾混入したことが考えられる。しかし結局赤色日乾レンガ壁の存続期間のどの段階に結びつくのか決定的なことはいえない。ただこの土器陰刻文が第Ⅶ層に帰せられることだけは確かである。

5. 文の検討

1 節のおわりでふれたようにこの陰刻文土器片がオストラコンではなく土器陰刻文であるという推測が文の性格を規制する。すなわちサマリヤ・オストラカ、テル・カシール・オストラカ、メツァド・ハシヤブヤフー・オストラカ等のように控えあるいは書簡ではなく、献呈の辞あるいは所有を表わす文の可能性が強い。⁵⁹⁾ と l の間の点はことばの区切りを示すが、その前の b' は欠損部分にかかっているので類推による復元を要する。

語間の点につづく l'smk は人名 'lsmk に前置詞 l を付したものである。人名は l+smk “エール(神)は支えてくださった”を意味する。ノートによると、名詞+動詞完了形の形式の人名はイスラエルでは王朝前からあり王朝時代も存続するが、とくに王朝時代はむしろ動詞完了形+名詞の形式の人名の方が多い。前者が圧倒的に多いのはフェニキア人名である。アラム人名では両者いずれの形式もそれほど頻繁に現われない。⁶⁰⁾

'lsmk の k のあとも欠損しているのでこの人名がこれで完結しているのかどうか分らないが、同一の人名は筆者の知る限りではほかに 1 例だけある。ルリスタン青銅製鉢陰刻文中に 'lsmk の子 (br) km(r') lh という人名が見出される。⁶¹⁾ 側面が美しい単純曲線をえがくこの浅い青銅製鉢の形はフェニキアの供物皿の形に通じるものがある、とデュボン・ソネルは述べている。鉢の内面中央に四枚の羽をひろげ、前脚と後脚にそれぞれ一つずつ小さい太陽円盤を持った甲虫とそれを囲んで小さいロゼッタを 45 ほど並べた円形紋が彫刻されている。甲虫紋は明らかにエジプトに由来するが、⁶²⁾ エジプト以外でも好んで模倣された。Lachish III, Pl.45, 167 の凍石製スカラベ印章を例にとると、ルリスタン青銅製鉢のと同様な姿態を示す甲虫紋が 2/3 を占め、その上方に smk, 2 本の平行線で区切られた下方 1/3 に l'hmlk とヘブライ文字が彫られている。文字は前 8 世紀後半、とくに前 700 年頃のシロアム碑文の字に近似しており、この印章が明らかにパレスチナにおける模造品であることを示している。ルリスタン青銅製鉢の陰刻文はヘブライ語、フェニキア語における bn に対して br を使用していることから明らかなようにアラム語である。それにロゼッタはメソポタミアに起源をもつ紋様である。もしこの青銅製鉢自体がルリスタンで製造されたものであれば、アラム人がフェニキアを経由して伝えたエジプト甲虫紋、フェニキアの鉢の形、メソポタミアのロゼッタを混合して使用し、一つの作品に仕上げ、それにアラム語の陰刻文を彫りつけたことになる。さらに鉢の所有者は g/'zr の僕と記されてい

るが、かれの主人の名前はむしろフェニキア以南を指し示す⁶³⁾しかしルリスタンとテル・ゼロールを結びつけるには不確定要素の方が多すぎる。

トランスヨルダンで発見されエルサレムのライフエンベルク・コレクションに属している白オパール製スカラボイド印章⁶⁴⁾は動物供犠の場面らしい紋様のまわりに粗雑な字で l'smk y と彫ってある。年代は前 8 世紀頃に帰せられているが、m などはそれより高い年代を示し s は低い年代を示す。字の画の方向や k と y の順が入りみだれていたり k が左右反対に彫ってあるなど、不馴れた職人の手で作られたことがわかる。さらに k がシロアム碑文のそれに近いことなどを考えあわせると、年代を少くも前 8 世紀後期にさげたほうがよいのではないかと思う。

以上ラキシユとトランスヨルダンの 2 例がルリスタンの例以外ではテル・ゼロール土器陰刻文の人名 l'smk にもっとも近い例である。

ヘブライ人名に smk を含む例として smkyw,⁶⁵⁾ smkyhw,⁶⁶⁾ ysmkyhw,⁶⁷⁾ 'hsmk⁶⁸⁾ 'hysmk⁶⁹⁾ mrsmk,⁷⁰⁾ 省略形と考えられる smk,⁷¹⁾ smky⁷²⁾ がある。

アラム人名には 'trsmk⁷³⁾ がある。

アッシリア人名には Samaku, Samak-ilu⁷⁴⁾ がある。

このように smk を含む人名はヘブライ人のそれに多く、しかも年代がわかっている資料をまとめてみると比較的年代が新しく前 8 世紀はもっとも古い例であることがわかる。しかし旧約聖書以外に前 9 世紀以前にさかのぼるヘブライ語資料は極めて少ないことを想起する必要がある。その旧約聖書の諸例はいずれも P 典ないしそれ以後、すなわち前 5 世紀以後に成立したと見られる記事に含まれている。ただ歴代志上 26, 7 の smkyhw と同じ人名がラキシユ・オストラカにみいだされるのは留意に値いする。これと歴代志下 31, 13 の ysmkyhw はともにレビ人の名前である。少なくとも前 7 世紀後期～6 世紀初にかけてラキシユに近い海岸平野やネゲブ北部でレビ人が地方行政に何らかの形で関与していたことが近年の発掘の成果により明らかになってきた。⁷⁵⁾したがって smk + YHW

の'theophor 人名がさらに年代をさかのぼる可能性がある。

テル・ゼロール土器陰刻文の'lsmk と同じ名前がなるほどアラム語陰刻文中に見出されるが、諸般の事情は前者がアラム人ないしアラム語であることを示してはおらず、むしろイスラエル人の名前である可能性すら強いといえる。

この陰刻文が土器の所有者を表わす文であるとはいいいにくい。そのばあい1 + 人名は文頭にくるかあるいはそれだけで独立しているのがふつうだからである。⁷⁶⁾ それに対して1 + 個有名詞が文中にくるのは献呈文によく見られる。⁷⁷⁾

フェニキア語、プニク語献呈文にしばしば見られるのは“1 + 'dn 又は rbt といったタイトル、1 + 個有名詞……”という形式であるが、固有名詞はこのばあい神名である。⁷⁸⁾

アラム語献呈文では“lū 1 + 人名”⁷⁹⁾ “物品と献呈者名、1 + 人名”の例がある。⁸⁰⁾

クロス教授は1964年現地で語間の点の前のb'は〔g〕b' でテル・ゼロールの当時の町名であろうという意見をのべた、と伝えきいた。そののち1966年大島団長宛書簡で町名説は変わっていないが〔g〕r'を提案しているのはさきに3節(1) b/r(/d) の項でのべた理由からであろう。gr' という古代の地名は筆者の知るかぎりパレスチナでは知られていない。gb' なら旧約聖書、サマリア・オストラコンNo.8に出てくる。旧約聖書のそれはエルサレムの北8～9kmに求められるがサマリア・オストラコンのはサマリアの東北東6 km のJaba'に同定される。⁸¹⁾

l'smkの前に町名gb'があるとしても、それは献呈者のタイトルないし居住地に関わりをもち、l'smkの居住地ではないかもしれないとすると、gb' はテル・ゼロール以外に求められなければならないことになる。

〔…〕b'は地名のほか人名、数詞、形容詞の可能性があり、決定的なことはいえない。

6. 結 論

前8世紀前半はイスラエル王国が繁栄した時代である。それまでダマスコの王ハザエル、ベンハダドII世により前9世紀中ばからイスラエル、ユダ王国に加えられた圧迫が、9世紀末アッシリアのアダドニラリIII世の度重なるシリア遠征とダマスコ制圧のため、のぞかれた。アッシリアはそののち前8世紀半ばまで有能な王をもたず、エジプトは衰退期に入り前8世紀中期からエチオピアとの抗争に入る。

テル・ゼロール第VII層はその前半がシリアの圧力下にあった時期に当たる。ガリラヤ湖東岸のエイン・ゲブの第III層からアラム語陰刻文 lšqy' を伴う土器片が出土した⁸²⁾ šqy' は宮廷高官の職制を表わす名詞で冠詞つきである。層位、palaeographyから前9世紀中期に帰せられる。発掘者の解釈によると、当時エイン・ゲブはシリアの支配下であり、前8世紀初にいたってイスラエル王ヨアシにより奪回された、ということである。シリアは同時にトランスヨルダンを制圧した。テル・ゼロール土器陰刻文からはテル・ゼロールがシリアの支配下にあった証拠をつかむことはできない。しかしアラム文字の影響を強くうけていることはたしかであり、その理由は上述の事情からうなずける。アラム文字の特長の方がヘブライ文字のそれを凌駕しているがそれにもかかわらずヘブライ文字の特長をとどめていることは、東西方向、南北方向にさまざまな勢力がゆきかう via maris (海の道)沿いの町にヘブライ文化がそのねばり強い生命力をとどめている1例といえよう。

註

- 1) 大島清編, テル・ゼロール (以下TZ) I, 1966, 16頁(日本文)。拙論, オリエンツ12/1-2(1970), 17~18頁。
- 2) G.A.Reisner, C.S.Fisher, D.G.Lyon, Harvard Excavations at Samaria 1908~1910(以下HES), Text, 1924, pp.232~8, 274~81. いわゆるサマリア・オストラカの土器はイスラエル時代(前900~700年)の甕形土器、水差形土器、鉢形土器の破片で、甕形土器と平底鉢形土器の破片が圧倒的に多い。

テル・ゼロール陰刻文土器片にもっとも近いのは、輪底よりそとにひろがる緩傾斜面がやがて上方に折れて稜線をなす鉢形土器である、p.280, No. 11, Fig. 156, 11a, b, オストラコン No.56. その他平底鉢形土器, pp. 277 f., No.14, Fig. 154, 2-7, オストラコン Nos.1, 3-12, 14, 24-5, 27-8, 30-1, 35, 37-8, 41-9, 51-2, 58 (以上側面が 45° ~ 30° 傾斜した直線), p. 278, No. 15, オストラコン Nos. 25, 29, 60, p. 278, No. 18, Fig. 154, 11-2, オストラコン No. 40 (側面彎曲), 輪底鉢形土器, p. 278, No. 19, Fig. 154, , 13, オストラコン No. 39 (側面彎曲) などが比較的近似しているが、平底であったり側面の傾斜がやや急である。

サマリア・オストラカのばあい周縁部に沿って行が弧をえがいている例はあるが (Nos. 1, 24, 27-30, 35-7, 43-4, 47-8, 58) 輪底に沿ってしかも内側に書いた例はない (Cf. Nos. 1, 9, 12, 27, 29, 39, 42, 45, 50)。

サマリア・オストラカの年代は考古学的比較層位の観点から Crowfoot, in J. W. & G. M. Crowfoot, K. M. Kenyon, *Samaria Sebaste* (以下 SS) III, 1957, pp. 467f.; G. E. Wright, *The Archaeology of Palestine*, in *The Bible and the Ancient Near East*, 1961, pp. 73-112 (pottery period) に依拠し、前8世紀前~中期と考えられる。cf. 石田友雄, サマリア・オストラカ研究, *オリエント* 8/3~4 (1966), 90~126頁はオストラカ文中の治世年代の読みと層位に関する Aharoni-Amiran と Crowfoot-Kenyon の説の折中にもとづいてオストラカをヨアシ王の時代、前8世紀初におく。元来長期保存を必要とする行政文書が土器片に記された例はラキシュにしろアラドにしろ動乱期であり、物資が欠乏した時期であったと考えられる。ヨアシとその子ヤラバム II 世の時代はシリア勢力を撃退し国は安泰な時期であった。その点ではハザエルの侵攻に悩まされたヨアシの父エホアハズとアッシリアのティグラト・ピレセル III 世の侵入の脅威にさらされたメナヘムの時期の方が状況に合致すると思う。それに問題の焦点となる Y. Yadin, *Ancient Judaeon Weights and the Date of the Samaria Ostraca*, *Scripta Hierosolymitana* 8 (1961), pp. 9-25 の錘の計算にもとづく論点は明解である。H. Donner-W. Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften* (以下 KAI), 1964, Nr. 183 はメナヘムの治世、前738/7年とする。

SS III, pp. 11-24, Pls. I-II, 1-10. これらのうち No. 1, 6, 10 は Fig. 13, 11-3 に比較される輪底皿形土器, Nos. 2, 7 は Fig. 14, 6-10 に比較される輪底が高く上部が HES オストラコン No. 56 と同様な鉢形土器である。いずれも前8世紀に属する。以下 SS III のオストラカ、土器陰刻文は HES のと区別するためサマリア・オストラコン C 1101 のように登録番号を付加する。

3) Y. Yadin, Y. Aharoni, I. Dunayevsky, T. Dothan, R. Amiran, J. Perrot, *Hazor II*, 1959.

4) TZ III, 1970, Pl. IV.

- 5) TZ III, 8-10頁。
- 6) J. B. Peckham, *The Development of the Late Phoenician Scripts*, 1968, p. 3.
- 7) B. Maisler (Mazar), *The Excavations at Tell Qasil: Preliminary Report III*, IEJ 1 (1950/1), pp. 204, 208-10, Pls. 37-8; idem, *The Hebrew Ostraca from Tell Qasile*, JNES 10 (1951), pp. 256-7.
- 8) ハーバード大学の F. M. Cross 教授は第 1 次発掘当時イスラエルを訪れ、そのさいテル・ゼロールの土器陰刻文をみて有益な suggestion をのこしてくれた。
- 9) イスラエル教育文化省考古局, *Hadashôth Arkeologiyoth*, 11 (1964), p. 21.
- 10) フェニキア文字：前12-11世紀のエル・ハドル槍穂先陰刻文 (Cross, BASOR 134 (1954), pp. 7, 10; KAI, Taf. I 21), 前11世紀の Rueisseh 銅鍍陰刻文 (KAI, Taf. I 20, vs. の d は倒立), 前11-10世紀のレバノン銅鍍陰刻文 (J. T. Milik, BASOR 143 (1956), pp. 3-6), 前10世紀のアヒーラーム碑文 (L. H. Vincent, RB 34 (1925), Pl. VI-VIII; KAI, Taf. I 1), 前10世紀末のシピトバアル碑文 (M. Dunand, *Byblia Grammata*, 1945, p. 148, Pl. XV; KAI, Taf. II 7), 前 9 (?) 世紀のサルジニアのノラ碑文 (W. F. Albright, BASOR 83 (1941), p. 18; KAI, Taf. II 46).
アラム文字：前10-9世紀のテル・ハラーフの祭壇碑文 (KAI, Taf. XII, 231).

ヘブライ文字：前10世紀後半のゲゼル・カレンダー (S. R. Driver, *Notes on the Hebrew Text and the Topography of the Books of Samuel*, 1913, Pl. I; M. Lidzbarski, *Ephemeris für semitische Epigraphik*, 1915, Taf. VI.; D. Diringer, *Le iscrizioni antico-ebraiche palestinesi*, 1934, Tav. I-II; S. Moscati, *L'epigrafia ebraica antica 1935-1950*, 1951, Tav. VII; KAI, Taf. XII 182).

しかしフェニキア文字：前 9 世紀のキプロス碑文 (Albright, BASOR 83 (1941), p. 15), 前825年頃のキラムワ碑文 (KAI, Taf. XXVII), アラム文字：前850年頃のメルカルト碑文 (Albright, BASOR 87 (1942), pp. 24f.), 前800年頃のザキル碑文 (KAI, Taf. XIII-IV) において r, d の縦の画は左傾斜になりきっており、ヘブライ文字のゲゼル・カレンダーでは右傾斜と左傾斜が混在し、モアブ文字のメシャ碑文 (M. Lidzbarski, *Handbuch der nordsemitischen Epigraphik* (以下 *Handbuch*), 1898, 1962 Nachdruck, Taf. I) ではことごとく左傾斜である。前 8-7 世紀に帰せられたアンモン碑文 (Aharoni, IEJ 1 (1950/1), pp. 220-1) の d と同定された文字は左右の縦の画がなす鋭角がテル・ゼロール土器陰刻文のそれより鋭いくらいであるが、右の縦の画がやや左傾斜ないし直立である。それに文字の上下一部が破損しているため確定的な比較対象としにくい。r は

右傾斜であるが、頭部が小さくそれに比して縦の画が長い。

- 11) たとえば Handbuch, Taf. XLV; Peckham, *ibid.*, Pl. VII 5.

一般的文字表は、cf. G. Gesenius, *Scripturae Linguaeque Phoeniciae*, 1837, Tab. 1, 3-4; Handbuch, Taf. XLIV-VI; G. A. Cooke, *A Text-Book of North-Semitic Inscriptions*, 1903, Pls. XII-IV; E. Kautzsch, *Gesenius' Hebrew Grammar*, 1910, 目次のあとの表; Diringer, *ibid.*, Tav. XXIX-XXX; H. Torczyner, *Lachish I, The Lachish Letters*, 1938, p. 220 と 221 の間の表; J. W. & G. M. Crowfoot, E. L. Sukenik, *SS II, Early Ivories from Samaria*, 1938, p. 7; Dunand, *ibid.*, p. 160, Fig. 52の年代は殆んどうけいれがたい; Moscati, *ibid.*, Tav. XXXIV; *Encyclopaedia Biblica I*, 1955, Jerusalem, "Alephbeth", Sp. 391-2, 407; Hazor II, p. 70; P. Benoit, J. T. Milik, et R. de Vaux, *Discoveries in the Judaean Desert II, Les grottes de Murabba'at* (以下 DJD II) *texte*, 1961, p. 94; Cross, *BASOR* 165 (1962), p. 37; A. R. Millard, *Iraq* 24(1962), p. 46; Peckham, *ibid.*, Pls. VII-VIII; F. Rosenthal, *Die aramais-tische Forschung*, 1964, *Schrifttaf.*

I; J. Friedrich, W. Röllig, *Phönizisch-Punische Grammatik, Analecta Orientalia* 46, 1970, *Schrifttafel* (巻末), 等を参照。

- 12) HES, pp. 239-243; Diringer, *ibid.*, Tav. III-VII.

- 13) SS III, pp. 11-16, Pl. 1 (2).

- 14) DJD II, *texte*, pp. 94, 96, Pl. XXVIII.

- 15) 前 8-7 世紀のアンモン文字の ' は大きいがやや楕円形をしており長軸は水平に近い。

- 16) KAI, Taf. I 3; Albright, *BASOR* 73(1939), p. 11, 前12世紀とする; Cross, *BASOR* 134(1954), p. 10-1, 前11世紀後期とする。

- 17) このばあい 1 の縦の画が行間の罫線に制約されているが、普通の位置より下にさげて刻まれている例がいくつかある。

- 18) CIS 123; Peckham, *ibid.*, Pl. VIII 3.

- 19) KAI, Taf. XIII-IV.

- 20) Handbuch, Taf. XXII.

- 21) *Ibid.*, Taf. XXIII.

- 22) A. Dupont-Sommer, & J. Starcky, *Les inscriptions araméennes de Sfiré* (以下 Sfiré), 1958, Pl. II-XXIX; J. A. Fitzmyer, *The Aramaic Inscriptions of Sefire* (以下 Sefire), 1967, Pls. XII-III, XVII. 長い 1 がまれにある。

- 23) KAI, Taf. XXXII 216; Handbuch, Taf. XXIV. これもキラムワ碑文のように行間の罫線に 1 の縦の画が制約されているが、大体普通の位置より下にさげて刻まれている。

- 24) KAI, Taf. XII 217.

- 25) Handbuch, Taf. XXV; KAI, Taf. XXIV-V. 前 7 世紀中頃のアッシ

- ュール出土のオストラカでは円形ではなく上部が開いている。その右上端から左下方へ筆が走っている例もある。KAI, Taf. XXVI 233.
- 26) Cf. Driver, *ibid.*, Pl. 1; KAI, Taf. XII 182. これはこの比較的軟質の板状石灰岩が、裏面の文字の痕跡等から分るように、生徒の習字用石板であったと推定されることから容易に説明がつく。
- 27) Albright, *The Proto-Sinaitic Inscriptions and Their Decipherment*, 1966, Fig. 1.
- 28) KAI, Taf. XII 182 のコピーには両画とも彎曲しているように印刷されているが, Diringer, *ibid.*, Tav. I や Moscati, Tav. VII によると直線ととれる。
- 29) Hazor II, Pl. CLXX 2. 両画の先端がいずれも少し欠けているので確定的とはいえないが, 線のほそり具合や彎曲から比率は約 $\frac{1}{2}$ であったと推定される。
- 30) *Ibid.*, 5 - 6.
- 31) *Ibid.*, Pl. CLXXII (下 = 8).
- 32) *Ibid.*, (上 = 7). 縦の画が逆にそりかえって右下方へ張りだしているのは, そをを殆んど水平近くまで倒したため p, m の長い横臥した縦の画同様の彎曲になったためと考えられる。
- 33) Maisler (Mazar), IEJ 1(1950/1), p. 204, Pl. 37A.
- 34) 縦の画の彎曲が右側に張りだすのはテル・カシール・オストラコン No. 1 の 'formal' な l の一つ, サマリア・オストラカの 'formal' な l にしばしば, ムラバアト・パピルスの 'cursive', 前 700 年頃のシロアム碑文の 'formal' (Kautzsch, *ibid.*, 文字表の次; Handbuch, Taf. XXI 1; Diringer, *ibid.*, Tav. XI), メツァド・ハシャブヤフー出土の前 7 世紀後期のオストラカの 'cursive' の一部 (J. Naveh, IEJ 10(1960), p. 130, Pl. 17, 12(1962), Pl. 6 A, C.), 前 6 世紀のラキシユ・オストラカ (Torczyner, *ibid.*; Aharoni, IEJ. 18(1968), pp. 2, 5, Pl. 1), と王朝時代後期のヘブライ文字の l の特長となり, やがてフェニキア文字, アラム文字に明確に表われる特色, すなわち前 5 世紀に縦の画が垂直となり右方への画は水平ないし右下方に向いその先にさらに下方ないし左下方への画が付されている, という発展の系譜(とくにアラム文字のそれ)を通して前 2 世紀以後の死海文書の文字 (Cross, *The Development of the Jewish Scripts, in The Bible and the Ancient Near East*, 1961, pp. 137-9, 148-9) へとつながって行くのである。
- 35) R. S. Lamon, G. M. Shipton, Megiddo I, Pl. 115.
- 36) CIS, Tab. IV 5; Handbuch, Taf. II 1; KAI Nr. 31 は前 750~25 年頃とする; Peckham, *ibid.*, Pl. VII 1.
- 37) Peckham, *ibid.*, Pl. VIII 1.
- 38) Peckham, *ibid.*, Pl. VII-X.
- 39) F. Thureau-Dangin, A. Barrois, G. Dossin, M. Dunand, Arslan Tash, *Bibliothèque archéologique et historique* 16(1931), Fig. 49.

- 40) 縦の画の「屈折型」も散見する。
- 41) ハツォールがカナンの強大な町であったこと、イスラエル人定住後も北からの侵入の危険にいつもさらされていたことを想起するなら、第Ⅷ層の土器陰刻文（前9世紀）の'がフェニキア、アラム文字の特色を示すのは興味深い。
- 42) 頭部は縦の画の先端につく。
- 43) SS III, Pls. I 4, II 5, 7-9.
- 44) ゲゼル・カレンターも同様であるが、頭部のV字の角度がより大きく、上の画とほうが下のそれより長い。
- 45) N. Avigad, IEJ 3(1953), Pls. 8-10, p. 149.
- 46) Dupont-Sommer, *Iranica Antiqua* 4(1964), Pls. XXXIII-IV, p. 109.
- 47) パナムムワ II世碑文のSは縦の画が頭部の下から下方へ出て頭部の水平方向の画を交差しないあらたな特色を示している。
- 48) Dupont-Sommer, *ibid.*, Pls. XXXV-VI, p. 113.
- 49) Stele I, II のSは縦の画が頭部の上へつき出ているのが原則で、そうでないのが若干混在する。Stele III はその逆である。
- 50) Diringer, *ibid.*, pp. 299f., Tav. XVI 5.
- 51) 頭部は'square'型である。中央の画は頭部の水平方向の画の下へ出ない。
- 52) SS III, p. 22, Pl. II 8. これも'square'型であるが、L字形を横に二つ並べて頭部を書いたもので、頭部中央の画をさいごに書くタイプとは別である。
- 53) 頭部中央の画が水平方向の画の下へ少しつき出ているが、フェニキア文字にこのタイプが現われるのはこの碑文が最初のほうに属する。
- 54) 前7世紀のフェニキア文字のばあい、両方の形が平行して発達する。
- 55) Cf. Peckham, *ibid.*, pp. 32-3, 152-4.
- 56) HES, p. 238, No. 64, Pl. 55a.
- 57) KAI, Taf. III 73, 79はミスプリント; Peckham, *ibid.*, Pl. VII 4.
- 58) TZ III, 10, 13頁。赤色日乾レンガ壁内側の地表面のレベルが次第に上昇したことがわかる。それに応じて内側から壁の下部を補強したらしい。当然外側擁壁の改修、補修が考えられる。
- 59) たとえば O. Tufnell, Ch. H. Inge, L. Hording, *Lachish II*, 1940, Pls. LI, LX, pp. 49-54(献呈); ハツォール第Ⅵ, Ⅴ層土器陰刻文(所有). Cf. Ranuccio Bianchi Bandinelli, *Rome, the Centre of Power*, *Roman Art to A. D. 200*, 1970, p. 12, Fig. 15, p. 399 は第6世紀のエトルスク鉢形土器で、テル・ゼロール陰刻文土器の輪底よりやや小さい直径約8 cmの輪底の外側に沿って所有者の名前が右から左の方向に刻まれている。写真だけなので正確な形状は分らないが、輪底より外に底部の緩傾斜面がひろがり、やがて上方に向い、やや外へはり出した口縁部で終る鉢形土器のようである。
- 60) M. Noth, *Die israelitischen Personennamen im Rahmen der ge-*

meinsemitischen Namengebung, 1966, S. 20-7.

- 61) 第2次発掘の帰途ドイツのミュンスター大学文学部でRöllig 博士（現在チュービンゲン大学教授）とテル・ゼロール土器陰刻文について検討中、同博士が前掲 *Iranica Antiqua* 誌の p. 113 にこの人名があるのを見出した。オクスフォード大学の Driver 教授からも同じ文献の指摘があったが、その他の例は指摘されなかった。
- 62) たとえばトゥットモースIV（前15世紀末～14世紀初）の戦車の装飾, H. Frankfort, *Kingship and Gods*, Fig. 45.
- 63) Dupont-Sommer の年代, 前 700 年頃をそのままとると; テル・ゼロール土器陰刻文との間には前 721 年のサマリア捕囚が起り, 捕囚民の一部はルリスタンの北メディナの町々に移された。
- 64) Moscati, *ibid.*, p. 54, Tav. XI 5.
- 65) *Idem.*, *ibid.*, p. 112, Tav. XXIX 5（前8世紀中頃）。
- 66) 旧約聖書, 歴代上26,7; ラキシユ・オストラカ 4,6; 11,4。
- 67) 歴代下31,13.
- 68) Moscati, *ibid.*, pp. 76f.
- 69) 旧約聖書, 出エジプト 31,6; 35,34; 38,23; いずれも P 典ないしそれ以後の付加。
- 70) Cook, *The Religion of Ancient Palestine*, 1930, pp. 56f., Pl. IX 29-30（前6世紀以後）。
- 71) Diringer, cf. 註50). Moscati, *ibid.*, p. 58, Tav. XII 7 = Lachish III 凍石スカラベ印章（前7～6世紀）の smk を人名ととらない解釈もある。
Idem., *ibid.*, pp. 74f., Tav. XVI 6.
- 72) Moscati, *ibid.*, p. 81, Tav. XVIII 8, これも四枚羽の甲虫紋を伴う。エレファンティン・パピルスにもある。これはアラム語であるが, ユダヤ人コロニーの人名である。
- 73) Dupont-Sommer, *Sfiré*, Pl. III-IV, l. 1,3,14, p. 15, pp. 23f.; Fitzmyer, *Sefire*, pp. 12-3, 191. , ,
- 74) Gesenius, *Heb. u. aram. Handwörterbuch*; Köhler, *Lexicon* の “Sma-khāhū” の項。
- 75) Naveh, *IEJ* 10(1960), pp. 129-39. Aharoni, *Hebrew Ostraca from Tel Arad*, *IEJ* 16(1966), pp. 1-7 の 'lyšb と旧約聖書の 'lyšyb は神殿関係者でもある。
- 76) 書簡のばあいは 'l + 人名, たとえばヘブライ語書簡, ラキシユ・オストラカ Nos. 2,6; アラム語書簡, KAI Nr. 233, 266.
- 77) 献呈文にも l + 個有名詞が文頭にくる例がある。 KAI Nr. 42 は女神 'Anat とプトレマイオス I 世ソーテール（前305-285年）にたいする献呈文であるが, 後者は Kaiserkultus の対象となった王であり, ここでも祭壇奉納の対象になっていることがそれを示す; Nr. 73, l + 'Aštart, Pygmalion（前8世紀）。

- 78) KAI Nr.17,18,47(以上前2世紀, フェニキア語); 64-4,66,71,72a,77,79,81,83,85,-8,94,97-9,102-111,113,116 (以上前5~1世紀, プニッ
ク語)。
- 79) KAI Nr. 204.
- 80) ルリスタン青銅製水差陰刻文; 前600年頃の同青銅製鉢陰刻文, Dupont-Sommer, *Iranica Antiqua* 4 (1964), pp. 115-8.
- 81) Cf. Aharoni, *Zephath of Thutmose*, IEJ 9(1959), pp.110-22は gb' と, テル・ゼロールに同定される可能性がある drr をカルメル山系をこえる Tel Asawir-Tel Yokne'am 間の沿道に求める。
Cf. B.Majar, *Topographical Studies I : From Geva to Beersheba*, Bulletin of the Israel Exploration Society Reader B, 1985 pp.46-48 (in Hebrew).
- 82) B. Mazar, A. Biran, M. Dothan, I. Dunayevsky, 'Ein Gev Excavations in 1961, IEJ 14(1964), pp. 1-49.

テル・ゼロール出土の陰刻文のある土器片

An Inscribed Sherd Found in Tel Zeror

Koichiro Goto

The writer tried to date the sherd from palaeographical point of view. It resulted in the first half of the eighth century B.C. This is contrasted with the examinations of pottery typology and stratigraphy, which have concluded some decades earlier date than the palaeographical one. The scripts show remarkable Aramaic characteristics, although they reserves tenaciously some so typical characteristics of the ancient Hebrew scripts that they seem not to be inscribed by the hands trained for orthodox Aramaic writing.